



メルロ＝ポンティ・サークル第21回大会プログラム

日時: 2015年9月26日(土) 10:00 -17:00

場所: 駿河台大学 第二講義棟

発表会場 2F7209教室 BM・シンポジウム会場 14F 会議室

会場:第二講義棟 2F 7209

個人発表

- | | | |
|-------------|--|---------|
| 10:00-10:45 | 田村正資(東京大学)
メルロ＝ポンティとソシユールにおける「動機付け」の概念 | 司会:八幡恵一 |
| 10:45-11:30 | 小倉拓也(日本学術振興会特別研究員(明治大学))
母胎と殺害 —— メラニー・クラインによるメルロ＝ポンティ —— | 司会:國領佳樹 |
| 11:30-12:15 | 川崎唯史(大阪大学)
英雄と逃走 ——メルロ＝ポンティにおける二つの自由 | 司会:澤田哲生 |
| 12:15-13:00 | 小手川正二郎(國學院大学)
身体性と性差 | 司会:河野哲也 |

13:00-13:30 昼食(時間が短いのでご注意ください)

会場:第二講義棟 14F 会議室

13:30-14:00

ビジネス・ミーティング

14:05-17:00

シンポジウム メルロ＝ポンティと17世紀

司会 伊藤泰雄

趣旨

現代の思想的課題を引き受けうる有力な思考のひとつとしてメルロ＝ポンティの哲学が採りあげられ、その可能性が拡張されつつある。しかし、可能性を広げるにあたり、同時に、その可能性を支える潜在性を培い、増殖させてゆかなければならないであろう。メルロ＝ポンティ哲学の所産を活用してゆくと同時に、むしろその豊かな鉱脈を掘り下げてゆく作業がなされなければならない。そうした意図のもと、われわれは、本年度のシンポジウムにおいて、メルロ＝ポンティの哲学を17世紀の哲学の光に晒すことを試みる。現代がポスト・モダンとして規定されるとすれば、近代の原点とみなされる17世紀に焦点を当て、メルロ＝ポンティ哲学と17世紀の哲学とが交錯する場に生ずる、絡み合いを見極めようとする努力によって、われわれは現代の思想的課題に取り組む実力を培うことが期待できる。「生きた存在論に満ちた大いなる合理主義」という17世紀の哲学に対するメルロ＝ポンティのまなざしに、パネリストの方々のまなざしはどのように介入し、交錯してゆくであろうか。

鈴木泉(東京大学)

(タイトル未定)

合田正人(明治大学)

スピノザ主義の深淵を前にして——メルロ＝ポンティのスピノザ

はたしてメルロ＝ポンティはスピノザとの対決を真摯に試みたことがあるのだろうか。発表者はこの点について、どちらかという否定的な見解を有している。しかし、このことはメルロ＝ポンティにおけるスピノザという問題の探求を免除するものでは決してない。まず、現象学との出会いに先立ってメルロ＝ポンティが否応なく巻き込まれていた思想状況は、レオン・ブランシュヴィックにせよアランにせよデルボスにせよ「スピノザ」の名を深く刻まれたものであった。この点で特に重要なのはブランシュヴィックの『スピノザとその同時代人たち』であり、この題名に含まれた「と」である。発表では、スピノザ主義の深淵を前にして崖縁から引き返したと告白するライブニッツの章に注目してこの接続詞について考察する。第二は、ジュール・ラニョーからアランへというスピノザ主義の伝承が「知覚」という行為の主題化につながっていったということである。身体は何をなしているのかという観点からこの点を探る。そして第三には、17世紀の「大合理主義」にスピノザを組み入れた際、メルロ＝ポンティが「肯定的無限」の問題に注目していることである。「間接的」というメルロ＝ポンティの鍵語をこの視点から考察する。

山口一郎(東洋大学)

メルロ＝ポンティの肉の概念とフッサールの受動的綜合

今回、綜合テーマである「メルロ＝ポンティと17世紀」に、どのような寄与をなしうるか、心もとないのですが、「ライブニッツの微小表象とフッサールの受動的綜合」についての私の論稿との繋がり、で、「メルロ＝ポンティの肉の概念とフッサールの受動的綜合」について考えるという課題をいただきました。微小表象と受動的綜合は、「時間と他者」という観点から展開されました。「肉と受動的綜合」を考察するにあたって、『見えるものと見えざるもの』で述べられている「そうなる過去と現在とがineinander(相互のうち)にあり、それぞれ包み-包まれるものとなる-そしてこれこそまさしく肉なのだ。」(邦訳、444頁)という文章の内実どこまで接近できるのかを考察の課題とします。この「肉における現在と過去の同時性」という逆説が、フッサールの「生き生きした現在」の「流れと立ち留まり」という逆説といかに事象的に相応しているか、またその相応関係にもかかわらず、その現象分析の次元において、どのような方法論的差異によって、一方で、存在論的現象学、他方で、受動的志向性の領域確定を前提にするモナド論的現象学への方向性が確定することになったのか、そして、それぞれの方向性の今後の学際的哲学の展開における位置づけを明確にしてみたいと思います。

全体討議

18:00～

懇親会(所沢にて開催予定)

連絡先：メルロ＝ポンティ・サークル事務局
〒651-21 神戸市西区学園西町 3-4 神戸市看護大学

Tel: 078-794-8041(Office)

Fax:020-4668-5122

(メールの場合) GHA01473@nifty.ne.jp

会場案内

大会会場:第二講義棟(下記地図①)・スクールバス停車場前

午前：第二講義棟2階7209(発表)、2階7208(控室)

午後：第二講義棟14階 会議室

昼食:大学会館(下記地図⑧)に、食堂・コンビニ・ショッピングセンターあり

